



# 早期療育で通常学級に

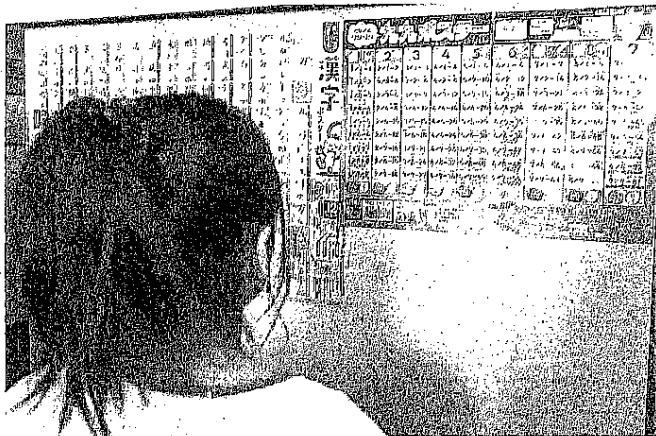
相手かまわず一方的にしゃべり続ける。同じ言葉の繰り返しや、場面に関係のない話を突然始める。

自閉症スペクトラム障害

と診断された関東地方の女児(8)は言葉が増えるにつれて、新たなコミュニケーションの問題に直面した。会話がマイペース過ぎて、

周囲がついて行けないのだ。対応に慣れた両親とは意思疎通できるものの、同年代の子どもとは会話が成立しなかった。

自己流の療育に限界を感じた母親は、2歳11か月になった女児を連れて、なかにまくりニック(埼玉県戸田市)発達外来を受診した。



自宅で九九を練習する関東地方の女児

主治医となった小児科医の平岩幹男さんは「着実に成長しています。楽しみながら療育を続けましょう」とアドバイスした。

療育には笑顔が欠かせないので、肩の力を抜くよう勧めたのだ。平岩さんは「1、2歳で発

育の遅れが明らかであれば、早期療育を始めるべきで、母親の対応は理想的だった。心配のし過ぎや過剰な診断は禁物だが、今の日本では必要な子どもに早期療育が行われていない」と指摘する。

平岩さんは外来対応を重ねるうちに、女児の言語能力の弱点を見つけた。女児は、耳で聞き取った言葉を理解しにくい特徴があったのだ。そのため相手の話に即座に対応できず、話が一方的になったり、見当違いの方向に進んだりした。

一方、目で見た言葉を理解する能力は優れていた。そこで平岩さんは、幼稚園に進んだ女児に、本を読んだり手紙を書いたりすることを勧めた。市販の幼児教材にも取り組み、学習能力を伸ばした。自閉症スペクトラム障害の子は、体のバランス感覚が未熟なことが

多いため、トランポリン教室にも通ってもらった。幼稚園の年長になると、特定の友達と仲良く遊べるようになった。友達の冗談が理解できず、けんかになることもあったが、無事に小学校の通常学級に進学した。読書好きで、同年代の子どもに負けないほど語彙力を伸ばしている。

女児がもし、療育を受けなければどうなっていたのか。平岩さんは「言葉をほとんど話せず、通常学級に進めなかった」とみる。女児は今も、お笑い番組で笑いのポイントが分からないなど、聞き取りの問題を抱える。だが母親は「友達への反応に合わせて笑うなど、欠点を補う行動ができるようになった」と変化の手応えを感じている。

平岩さんは「この障害の子は、人間関係が複雑化する思春期をどう乗り越えるかが重要。対人関係を円滑にするコツを身につけてもらうなど、継続的な支援が欠かせない」と語る。

くらしの家庭



# 「統合失調症」多い誤診

「お子さんよりもお父さんのほうが心配です」

2006年、不注意な行動が目立つ小学生の長男の付き添いで埼玉県戸田市のなかじまクリニック発達外来を訪れた父親に、担当医の平岩幹男さんが話しかけた。表情の変化が乏しく、言葉もたどたどしい様子が気になったのだ。

直感では正しかった。父親は1997年、20歳代後半で統合失調症と診断されていた。幻聴や妄想に苦しむ病気で、父親は精神科医が処方する多くの薬を飲み続けた。しかし、効果よりも記憶力や気力の低下を招き、仕事にも支障が出た。

父親に比べれば、長男は対処しやすかった。学習能力が高く、テストは素早く解けるのに不注意な解答ミスを繰り返す。友達との会話中に趣味の話我突然始めて浮いてしまう。学校で発

達の障害を疑われたが、平岩さんは「障害と呼ぶような段階ではない」と判断した。

テストは提出前に何度も見直す習慣をつける。友達の話をする時は、その前に必ず「話は変わるけど」と断る。こうした生活技能面のアドバイスで、長男の問題は解消していった。

一方、父親の状態はますます悪化し、退職に追い込まれた。平岩さんは、父親の成育歴や病歴を知れば知



元気になった父親（左）と話をする平岩さん（埼玉県戸田市で）

求めたが、「薬を減らすと更に悪くなる」と拒否された。

2010年、父親は平岩さんの指導で薬を少しずつ減らした。半年後にはゼロになり「やる気と思考力がウソのように戻った」。今は専門技能を生かし、大手ゲーム会社で働いている。

父親は、自閉症スペクトラム障害の一つ、高機能自閉症だった。このタイプは知的能力に問題がなく、一芸に秀でて活躍する例もある。ところが、強いストレスを受けると妄想的な行動が出たり、強迫的な考えにとりつかれたりする場合がある。ストレスの多い思春期や青年期に、こうした状態に陥り、統合失調症と誤診される事例が後を絶たない。

平岩さんは「引きこもりも、多くは高機能自閉症などが背景にある。彼らの特性を知り抜いた医療関係者のカウンセリングや、予防のための療育の充実が欠かせない」と語る。

くらし 家庭